

サバ軍曹

ある夏の日の夜、ホセと私は家を出て、涼しい戸外へ散歩に出かけようとしていた。耐えがたい炎暑の一日を過ごした後、そのひとときの砂漠はいかにもさわやかで心地よかった。

その時刻には、近所のサハラウイはみな子供を連れて食べ物も外へ持ち出し、家の外で食事をしてきた。夜はかなり更けていた。

私たちが町の外にある墓場近くまで行った時、すぐ先の方で、月明りの中、サハラウイの若者たちがなにかを取り巻いて騒いでいるのが目に入った。人だかりのそばを通り過ぎる時、地面にスペイン人の軍人が身動きもせずうつぶせになっているのに気がついた。死体かと思ったが、顔色は赤くつやつやしており、立派な髭をたくわえ、ブーツを履いていた。その軍服から、砂漠軍団のものとかわかったが、階級を識別する徽章しやうはなかった。

その姿のまま随分時間がたっているようだった。野次馬たちは大声でアラビア語をしゃべりながら、ふざけて唾を吐きかけたり、ブーツを引っ張ったり、手をふんづけたりしていた。またその中のサハラウイの一人はその軍人の軍帽までかぶって、ピエロのように酔っぱらいの真似をしていた。

なんの抵抗力もない軍人に対して、サハラウイは好き放題をしてはばからなかった。

「ホセ、はやく車を取って来てちょうだい」そっとホセに言うと、私は気を張り詰めてあたりを見回していた。その時、別の軍人かそれともスペインの民間人がそこを通りますようにとどんなに願ったことか、だが近くを通る人は一人もいなかった。

ホセが走って車を取りに帰ると、私はその軍人が腰につけていたピストルからずっと目を離さなかった。もしだれかがそのピストルをはずしたら、大声を上げるつもりでいたが、その次にどうしたらいいのか思いつかなかった。

その頃スペイン領サハラサハラの若者たちは、すでに「ポリサリオ人民解放戦線」を組織しており、本部はアルジェリアにあったが、町のどの若者の心もほぼすべてそこに向き、スペイン人とサハラウイとの関係は非常に緊張していた。砂漠軍団とこの土地とはさらに不倶戴天の敵と言えた。

ホセが車をすっ飛ばして戻って来ると、二人で人込みを押しわけ、その酔っ払いを車の中へ引っ張り入れようとした。だがその男は背が高くがっちりとした体格で、抱えて車まで運ぶのはおごごだった。二人で全身汗まみれになって、やっと後部座席におさめると、ドアを閉め、ごめんなさいと言いながら、ゆっくりと人込みを走り抜けた。それでもガンガンと何度も車の屋根を叩かれた。

砂漠軍団の正門に近づいたが、ホセは依然としてスピードを緩めなかった。軍営地の周辺一帯は死のような静寂につままれていた。

「ホセ、ライトを点滅させて、クラクションも鳴らしてちょうだい。私たちが言葉を知らないんだから、間違われるわ。離れたところで止めてね」

車は衛兵のいるところからずっと離れた所で止まった。急いでドアを開け外に出ると、スペイン語

で大声を上げた。「酔っ払いを送って来たわ。こっちへ来て見てちょうだい！」

衛兵が二人駆けて来ると、ガチャと銃に弾を込め、私たちに向けた。ホセも私も車を指さしたまま、身動きもしなかった。

二人の衛兵はちらと車の中を見たが、当然知った顔だ。すぐに車に入り込み二人でその軍人を抱え出し、ぶつぶつと言っていた。「またこいつだ！」

その時、高い塀の上の探照灯がさあーっと私たちを照らした。私はその物々しい様子にすっかりおじけづき、早々に車の中へ逃げ込んだ。

発車する時、二人の衛兵は私たちに向かって軍隊式の敬礼をした。「ありがとう！ 同胞！」家に向かう道中、私はまだ胸がどきどきしていた。あんなに近くで銃を突き付けられたことは、生まれて初めてのことだった。あれは味方の軍隊だったが、やはりとても緊張した。

その後何日も夜間の警戒厳重な軍営地区と、あの泥酔した軍人のことを考えていた。

それから間もなく、ホセの同僚たちが家に遊びに来た。私は彼らに歓迎の誠意を表して、冷たく冷やした牛乳を大きな壺いっぱいご馳走した。その数人は冷えた牛乳を、まるで牛が水を飲むようにあつという間に飲みほした。私は慌ててまた二パック開けた。

「サンマウ、俺たちが飲んだらきみたちどうするの？」その内の二人が情けない顔をして牛乳を眺め、それから申し訳なさそうにまた飲んだ。

「安心して飲んでちょうだい！ あなたたちふだん飲めないんだから」

食べ物は砂漠に住むだれにとっても関心のある話題だった。招待された人はそれだけでは満足せず、その美味しいものはどこから来たのか必ず聞いた。

ホセの同僚はその日の午後わが家のありつたけの新鮮な牛乳を飲んでしまったが、私が平然としているのを見て、果たしてその入手先を知りたがった。

「ええ！ 買うところがあるの」私はもったいぶって答えた。

「どこだい、教えてくれよ！」

「駄目、あなたたち行けないわ。飲みたかったら家にいらっしやい！」

「俺たち沢山ほしいんだ。サンマウ、お願いだ。教えてくれよ！」

「砂漠軍団の酒保で買うの」

「軍営だって？ 女のきみが軍営へ買物に行くのかい？」彼らは大声を上げた。なんとも間拔けな顔つき！

「軍人の家族だって買ってるじゃないの、私も勿論行くわ」

「だがきみは軍人の家族でもない民間人だろう！」

「砂漠の民間人は都市の人とは違うわ。軍民家を分かつたよ」にこにこ笑って答えた。

「軍人は、少しは礼儀をわきまえているかい？」

「とても礼儀正しいわ。町の一般の人たちよりずっといいわ」

「牛乳を買ってもらって大丈夫？」

「大丈夫よ。いくつ要るのか明日メモをちょうだい！」

翌日仕事から帰ったホセから、牛乳の注文リストを渡された。そこには八人の独身の男の名前が並んでおり、各自が毎週十パックの調達を希望しており、合計八十パックだ。

私はリストを手にしたまま唇をかんだ。調子の良いことを言ったからには、八十パックの牛乳を自分で軍営へ行って買わねばならない。実際なんとも言い出しにくい。

かくなるうへは、いっそのこと恥をかくのを一度でかたづけすることにした。その八十パックという恥さらしな数を一度に買って、もう行かないのだ。その方が十パックずつ毎日買いに行くよりましだ。翌々日、酒保へ行って十パック詰めの牛乳の大箱をひとつ買った。人に頼んで壁際まで運んでもらうと、くるりと引返してまた入って行ってまた一箱買い、また壁際へ置く。少したつと、また入って行って買う。このように行ったり来たり四往復すると、カウンターに立っていた雑役兵は目を回した。

「サンマウ、あと何回行ったり来たりするつもり？」

「あと四回よ。がまんしてね」

「なぜ一度に買わないの、全部牛乳かい？」

「一度に買うと規則違反になるわ。多すぎるから」なんとも恐縮して答えた。

「大丈夫だよ、すぐ運んであげよう。でも一度にこんなに沢山の牛乳をどうするの？」

「人に頼まれたの。私の分だけじゃないの」

大きな箱を八つ壁際に積み上げると、私はタクシーを呼びに行こうとした。その時そばにすつとジープが止まった。顔を上げると、驚いたことに、運転席に座っていたその軍人は、あの日ホセと軍営

区まで送り届けた酔っ払いではないか。

その人は大柄で背が高く、元氣そうで、軍服がピシリと決まっていた。ひげだらけの顔は何歳とも見分けがつかなかったが、人を見る目付きに幾分横柄で、また過分に人を見据えるようなきらいがあった。上着のボタンは三番めまで開いており、頭は角刈りで、グリーン色の舟形の軍帽についた階級の徽章は——軍曹だった。

私はあの晩彼のことをはっきり見ていなかったので、極力注意して観察した。

私が何も言わないうちに、彼はジープから飛び下りると小山のような箱をひとつひとつ車へ運び上げた。牛乳が全部積み込まれたのを見ると、私はそれ以上ためらうことなく、助手席に乗り込んだ。

「墓場地区に住んでいます」私は丁寧と言った。

「あなたの家は知ってる」荒っぽい口調でそう言うと、発車させた。

途中二人ともずっと黙っていた。彼は両手でしっかりとハンドルを握り、穏やかに運転した。墓場を通り過ぎる時、私は目を遠くの風景にそらした。彼がああ晩酔態を演じ、私たちに拾われた哀れな姿を思い出しては気の毒だと思ったからだ。

家の前まで行くと、彼はゆっくりとブレーキをかけた。彼が車を下りるより先、私は車を飛び下りた。軍曹にまた牛乳を運ばせては申し訳ないと思ったからだ。私は車を下りると、すぐに大声で近くで雑貨店を開いている友達のリチャードを呼んだ。

リチャードは私が呼ぶのを聞くと、すぐにサンダルをつっかけ店から飛び出して来た。顔には控えめな笑みが浮かんでいた。

シャロンはジープの前まで走って来ると、軍人が一人私のそばに立っているのに気付く、突然足を止めたが、すぐうつむいてそそくさと箱を下ろしにかかった。その表情はまるで悪魔にでも出会ったかのように見えた。

その時、私を送ってきた軍曹は、シャロンが私の手伝いをするのを見て、次には彼の小さな店に目を移しちらっと眺めた。それから突然私の方に向き直ると軽蔑したような目付きでじろりと私をにらんだ。私は彼が私の行為を誤解したに違いないと敏感に察した。まっ赤になった私は、しどろもどろに弁解した。「この牛乳は転売するんじゃないんです。本当です！ 信じてください。人に——」

軍曹はずかずかと歩いて車に乗り込むと、手をハンドルの上に置いてぱっとたたき、何か言おうとしたが何も言わず、エンジンかけた。

我に戻った私は走って行って言った。「どうも有難うございました。軍曹！ お名前はなんと？」  
彼はじろっと私を見ると、腹に据えかねるといった風に素っ気なく言った。「サハラウイの友達なんか、教える名前はない」

そう言うなりアクセルを踏み、猛スピードで飛び出して行った。

私は呆然として舞い上がる砂ぼこりを眺めながら、言い様のない無念さかられた。人に濡れ衣を着せられて、言い訳も聞いてもらえなかった。名前を聞いても失礼にも拒絶された。

「シャロン、あなたあの人を知ってる？」振り返ってシャロンに聞いた。

「はい」小さな声が返った。

「どうしてそんなに砂漠軍団が怖いのか。あなたゲリラでもないのに？」

「そうじゃないよ。あの軍曹は、俺たちサハラウイすべてを恨んでいるんだ」

「どうしてそんなことがわかるの？」

「だれでも知ってるよ。知らないのはあんなだけだ」

私はあれこれ考えながら正直なシャロンを見た。シャロンは従来人のことをとやかく言ったことはなかった。彼がそんなふうに言うには彼なりの訳があるに違いなかった。

牛乳を買って人に誤解されてからは、恥ずかしくてしばらく軍営へ買物に行く勇気がなかった。随分たつてから、町で酒保の雑役兵に会った。彼の口から彼らの隊では私がどっかへ行ったと思っていることがわかった。彼はどうしても買物に來ないのかと聞いた。私は別に誤解されていないということがわかり、また喜んで行くようになった。

なんとも運の悪いことに、再び軍営へ買物に行くようになった最初の日、あの軍曹がブーツの音をたてて近づいて来た。私は唇をかみしめ緊張して彼をみつめた。彼は私に向かって会釈をすると言った。「こんにちばー！」そしてカウンターへ行った。

あれほどサハラウイを嫌う人を、私は「人種差別」と解釈し、もう関わり合う気はなかった。彼のそばに立っていたが、もっぱら雑役兵に必要な品物を言い、もう彼の方は見なかった。

お金を払う時、隣にいたその軍曹の袖をまくった腕に、なんと大きな入れ墨が彫られているのが見つかった。濃いブルーの俗っぽいハートの下に、横一列中サイズの文字が彫られていた——「オーズトリアのドンファン」

とても不思議に思った。もともと入れ墨のハートの下にあるのは必ず女の名前だと思っていたのに、それが男の名前とは……

「ねえ！『オーストリアのドンファン』って誰なの？ どういう意味？」

その軍曹が立ち去ると、私はすぐカウンターの雑役兵に聞いた。

「ああ、あれは砂漠軍団の以前あった軍営区の名前だよ」

「人の名前じゃないの？」

「うん、カルロス一世の頃にいた人の名前さ。その頃オーストリアとスペインはまだ分割されていなかった。その後軍団はこの名前のある軍営区の呼称に使ったんだ。随分昔の話さ」

「でも、さっきあの軍曹はその名前を腕に彫ってたわ」

私は合点がいかぬまま、おつりを受け取ると、酒保の門を出た。

思いがけないことに、門口であの軍曹が待っていた。私を目にすると、ちよつと頭をさげ、私について大またで数歩歩くと、はじめて口を利いた。「あの晩はあなたとご主人に、世話になって」

「なんのこと？」訳がわからなかった。

「お二人に送っていただいて。酔っぱらって……」

「ああ！ だいぶ前のことね！」おかしな人だ。もう忘れてしまったような事に、突然お札を言ったりして。この前送ってくれた時どうして言わなかったのだろうか？

「お聞きしたいわ。なぜサハラウイたちは、あなたがサハラウイを憎んでいると噂しているのですか？」私は軽率にも聞いた。

「恨んでいる」彼はじろりと私を見つめた。かくもあからさまに答えるのを聞いて私はやはり驚いた。「世の中には良い人も悪い人もいるけど、その民族が特に悪いってことはないわ」私はだれもが言うようなことを単純に口にした。

軍曹は砂地に群れになってうずくまっているサハラウイにさつと視線を走らせたが、その人を射るような目つきはまたひとときわ恐ろしかった。まるでどうしようもない憎しみの炎に焼かれているかのようでぞつとした。私は自分のくだらない話をやめ、呆然と彼を見つめていた。

彼は数秒後はつと我にかえったように、私に向かって丁寧に頭を下げると、さつさと立ち去った。入れ墨をしたその軍曹は、やはり名を告げなかった。腕には確かにある軍営区の完全な名前が彫られていたが、なぜそんな昔の軍営区なのか。

ある日、サハラウイの友達のアリに招かれて、ホセといっしょに町から百キロあまり離れた所へ行った。彼の父親はその大きなテントに住んでいたが、アリは町でタクシーの運転手をしていたので、週末にしか両親に会いに帰れなかった。

両親が住んでいたところは「メサイヤ」と呼ばれていた。はるか大昔は大きな河が流れていたのだろう。それが干上がって両岸は大峡谷を思わせる断崖となっていた。その間の河床にあたる部分に、数本のやしの樹が生え、水が絶えず湧き出している泉があった。きわめて小さな砂漠のオアシスだ。そんな広々とした場所で、また良い淡水もあるのに、どうしてわざわざ数個のテントに人が住んでいるだけなのかとても不思議に思った。

夕暮れ時の涼しい風に吹かれて、私たちはアリの父親といっしょにテントの外に座っていた。老人

はゆつたりと長いきせるを吸っており、赤い断崖が夕焼けの中で雄壮な眺めを呈し、空にはいちばん星がぼつんと姿を現わした。

母親は大皿いっぱい「クスクス」と濃い甘茶を持って来て振る舞ってくれた。

私は指先で「クスクス」をこねて、灰色のだんごにして口に入れた。そのような風景のもとでは、地べたに腰を下ろし、砂漠の民の食べ物を楽しむのがふさわしかった。

「こんな良いところに、泉もあるのに、どうしてほとんど人が住んでいないの？」不思議に思い、老いた父親に聞いた。

「昔はにぎやかだったよ。だからこそ、この地は『メサイヤ』という名で呼ばれていた。あのむごたらしい事件が起こった後は、以前から住んでいた者はみな去って行き、新しい者は当然来ようとしな。今じゃ俺たちわずか数家族が、ここにへばりついているだけになった」

「むごたらしい事件って？ 聞いたことないわ。ラクダが伝染病で死んだの？」老人に聞いた。老人は私に目を向け、ゆっくりときせるを吸うと、急に虚ろな表情になって遠くの方に視線を移した。

「殺したんだ！ 人を殺したんだよ！ 一面血に染まり、当時この泉の水もだれももう飲もうとはしなかった」

「だれがだれを殺したの？ どういうことなの？」私は思わずホセのほうににじり寄った。老人の声はひどく神秘的で恐ろしく、あたりは、突然闇につつまれた。

「サハラウィが砂漠軍団の人間を殺したんだ」老人は低い声で言いながら、ホセと私を見やった。

「十六年前、『メサイヤ』は美しいオアシスだった。そこには、小麦さえ育った。ナツメヤシの実がそこいらじゅういっぱい落ちて、飲み水はいくらでもあった。サハラウィはほとんど皆ここへラクダやヤギを追って来て放牧した。テントの数はおびただしい数にのぼった——」

老人が過去の賑わいを切々と訴えるのを聞きながら、私はわずかに残る数本のヤシの木を眺め、この干からびた土地にも青春があったということがほとんど信じられなかった。

「その後スペインの砂漠軍団も進駐して来た。そしてここに宿営して、去ろうとはしなかった——」老人の話は続いた。

「でも、その頃のサハラ砂漠はだれのものでもなかったから、だれが来ようと法を犯したことはないでしょう」私は口を挟んで老人の話を中断した。

「そうだ。続きを聞きなさい——」老人はさえぎるような手つきをした。

「砂漠軍団がやって来たが、サハラウィは彼らに水を使うことを許さなかった。そのため双方で水をめぐって、しばしば争いが起こった。その後——」

老人が口をつぐんだので、私はせっかちに聞いた。「それからどうなったの？」

「その後、サハラウィは徒党を組んで兵舎に奇襲をかけた。砂漠軍団のすべての人間が、一夜のうち眠っている間に皆殺しにされた。ことごとく刀で切り殺されたのだ」

私は目を見開き、火の向こうに座っている老人を見つめ、声をひそめて聞いた。「みんな殺されたって言うの？ 全軍営の人間が一人残らずサハラウィに刀で殺されたって？」

「軍曹が一人だけ残った。そいつはその晩酒に酔って、軍営の外で寝込んでいた。目が覚めると仲間

はみんな死んでいたのだ。一人残らずね」  
「その時あなたはここに住んでいたの？」私はもう少しで聞くとところだった。「その時あなたはその人殺しに加わったの？」

「砂漠軍団は最高に機敏な軍団だ。そんなことができたって？」ホセが言った。

「予測できなかったんだ。みんな昼間の活動でへとへとに疲れていたし、歩哨に立つ衛兵の数も少なかった。サハラウィが刀を持って襲って来るなど、夢にも思わなかった」

「軍団はその時どこに宿営してたの？」

「ちょうどあのあたりだ！」

老人は泉の上の方を指さした。そこには砂地が広がっているだけで、人が住んだという痕跡はいささかもなかった。

「その時以来、だれもここに住もうとはしなくなった。人殺しをした奴たちは勿論逃げに行った。美しいオアシスはこんなぐあいに荒れ果ててしまったのだ」

老人はうつむいてきせるを吸った。日はすっかり暮れて、激しい風が突然吹き渡って来た。ヒューヒューと泣くような音も入り混じり、ヤシの樹は揺れ、テントの支柱もガタガタときしみだした。

私は顔を上げ闇の中のかなた、十六年前砂漠軍団が宿営していたあたりを見ていた。軍服を着たスペイン兵がいく手にも分れて頭を布で覆い刀を振り上げたサハラウィと白兵戦を演じているのが見えるような気がした。兵隊たちのひとりひとりがまるで映画のスローモーションのように次々と刀の下に倒れていった。おり重なった兵士たちは血を流しながら砂の上を這っており、千にものぼる虚しく

救いを求める手が天に向かって伸ばされ、声にはならぬ叫び声が血にまみれたどの顔からもほとばしっていた。闇の中を吹き渡る風の中を、死のうつろな笑い声が寂しい大地の上に響きわたっていた。

驚いた私は力を込めてぐっと瞬きをする、すべてが消え去り、あたりはもとのまま平穏で静かで、火を囲んで座ったホセと私、そして他の人たちも、だれひとり口を利く者はなかった。

私は突然寒けを覚え、胸がふさがった。これは単に老人の言うような殺人事件なんかじゃない。残酷極まる大量虐殺なのだ！

「その唯一生き残った軍曹というのは——つまりあの腕に入れ墨をした、いつも狼のような目でサハラウィをにらんでいるあの人の？」私はそっと聞いた。

「あいつらはずっと堅く団結した仲の良い軍曹だった。今でも覚えているよ。あの軍曹が酔いから醒めて、死んだ兄弟のしかばねに狂ったように抱きついて震えていた姿を」

私は突然あの軍曹が腕に軍曹の名を彫っていたのを思い出した。

「あの人の名前を知ってる？」

「あの事件の後、あいつは町の軍管区へ編入された。その時以来、自分の名を言わない。あいつが言うには、軍管の兄弟が全部死んでしまったのに、自分に名前なんかあるものかって。皆はあいつのことを軍曹とのみ呼んでいる」

過ぎ去ってずいぶんたった古いことなのに、思い出すとやはり恐ろしくて鳥肌が立った。遠くの砂地がうごめくような気がした。

「さあ、寝るとするか！ 日が暮れたよ」ホセがわざと元気な大声を上げた。それから黙ったまま、



テントの中にもぐり込んだ。

そのことはすでに歴史上の悲劇となっており、町で人の口にのぼることはほとんどなかったが、私はその軍曹を見かけるたびに、いつも動悸を覚えた。そんな痛ましい記憶は、いつになったら彼の心の中で薄らぐのだろうか？

去年（一九七五年）の今頃から、この世界の人々に忘れられていた砂漠は突然複雑なことになってきた。北のモロッコと南のモリタニアがスペイン領サハラを分割しようとしており、一方、砂漠の住民サハラウィはゲリラ隊を組織して本部はアルジェリアに逃れていた。彼らは独立を要求していたが、スペイン政府は去就が定まらず、態度はあいまいで、この長年にわたって心血を注いできた属領から手を引くべきかそれとも守るべきか、決断はみられなかった。

その頃、スペインの兵士は単独で外出すると殺され、深い井戸に毒薬が投げ込まれ、小学校のスクールバスからは時限爆弾が発見された。燐鉱石の会社の輸送ベルトに放火され、夜警員が電線に吊るされて死んでいた。町の外の道路では通りかかった車が地雷を踏んで爆破された――

うち続く騒乱のため、町中が恐れおののいており、政府は直ちに学校を閉鎖し、子供たちをスペインへ疎開させた。夜間は全面的に戒厳令が敷かれ、町には次々と戦車が入り込み、軍事機関の建物には何重にも鉄条網が張り巡らされた。

恐ろしいのは、国境線上スペイン領は三面敵に囲まれていたので、小さな町では、それらの騒乱が

どういう側から引き起こされたものかわからないことだった。

そんな状況のもとで、女や子供はほとんどすぐにスペインへ帰ろうとしていた。ホセと私は世話を焼く家族もいなかったもので、様子を見ることにして動かなかった。彼はいつも通りに出勤し、私は家にいた。普段は手紙を出しに行ったり食事の買物に行くほかは、公共の場所は爆破の恐れがあるので、もうめったに外出しなかった。

ずっと静かだった町に、家具の安売りを始める人が出てきた。航空会社の入口には、毎日チケットを買い争う人々の長蛇の列が並んだ。映画館、商店はどこも店を閉め、駐在するスペインの公務員すべてにピストルが支給された。空気はみよように緊張しており、まだなら戦争となる正面的な衝突は起こってはいないその小さな町は、すでに混乱と不安の中にいた。

ある日の午後、その日のスペインの新聞を買うために町へ行った。政府がこの土地をいったいどうするつもりなのか知りたかったが、新聞にはその事はなにも書かれておらず、毎日あいも変わらず内容だった。鬱陶しい気分であらぶらと家の方に歩いていると、途中棺桶をいっぱい積んだ軍用トラックが墓場の方へ走って行くのが目に入った。国境ではすでにモロッコ人との戦いが始まっているのかと思い驚いた。

家へ帰る道は、必ず墓場を通り抜けて行く。サハラウィはニカ所自分たちの大きな墓地を持っているが、砂漠軍団の共同墓地はまっ白な柵で囲まれており、模様を彫った一枚の黒い鉄の扉が閉まっていた。塀の中には何列にも十字架が並んで立っており、十字架の下にはそれぞれ平らな石板が敷かれて墓となっていた。

私が通り過ぎる時、墓地の鉄の扉は開いており、すでに一列めの石板の下の墓が掘り起こされてい  
た。大勢の砂漠軍団の兵士たちがひとつひとつ、死んだ兄弟たちを運び出し、新しい棺桶に納めてい  
た。

その情景を見た瞬間、私はスペイン政府が長々と宣言をこぼんできた決定をただちに悟った。砂漠  
軍団は生きる者は砂漠に生き、死ねば砂漠に埋葬されるという兵士だ。今彼らは自分たちの死人さえ  
も掘り起こして一緒に連れ帰ろうとしていた。ということは、スペインは結局この土地を放棄しよう  
としているのだ！

恐ろしかったのは、ひとつひとつの死体が、死後何年もたつというのに、乾燥した砂の中から掘り  
起こすと、ひと塊の白骨ではなく、ひとつひとつミイラのようにひからびた死体だったことだ。

軍団の人々は死体を注意深く持ち出し、照りつける太陽のもと、そっと新しい棺桶に納め、釘を打  
ち、字を書いた紙を貼り、それから車に積み込んだ。

棺桶を運び出すために、見物に集まっていた人々は道を開けたので、私は墓地の中まで押されて行  
った。その時、はじめてあの名のない軍曹が塹のかげに座っているのに気がついた。

私は死体を見てもあまり動揺しなかったが、ただ棺桶に釘を打つ音はたまらなかった。突然その時  
軍曹を目にして、あの夜酒に酔って地べたに転がっていた様子を思い出した。あの夜もやはりこの墓  
場の近くだった。ずいぶん昔の惨事なのに、彼の凄惨な記憶はいまなお薄れていないのだ。

三列めの石板が開かれた時、軍曹は待ちかねたように立ち上がり、大腿で歩いて行くと、穴の中に  
飛び下りた。その手で腐乱のない死体をまるで恋人を抱くかのように抱き上げ、そっと腕の中に横た

えると、静かにその干乾びた顔を見つめていた。彼の表情には恨みも怒りもなかった。私に感じられ  
たのはただ穏やかともいえるような哀しみだけだった。

皆は軍曹が死体を棺に納めるのを待っていた。彼は、強烈な陽ざしの下に、この世を忘れてしまっ  
たかのように立っていた。

「弟だよ。あの時、皆殺しにされた」一人の兵士が、十字鋏を持ったもう一人の兵士に小声で言った。  
随分長いことたって、軍曹はやつと棺桶に向かって歩き出した。死んで十六年になる肉親を、赤ん  
坊をあやすようにそっと永遠の眠りの床に横たえた。

軍曹が門を出て行く時、私は視線をそらした。私のことを平気で見物している物好きだと思つて欲  
しくなかった。寄り集まったサハラウイの野次馬の中を通り過ぎる時、彼は突然足を止めた。サハラ  
ウイたちは子供の手を引いて散り散りになって逃げた。

一列ずつ並べられた棺桶は飛行場へ運ばれ、地下に眠っていた兄弟たちは先に連れて行かれた。整  
然と並んだ十字架だけが残され、太陽の下でまぶしく白く光っていた。

その朝、ホセは早番だったので、五時半に家を出なければならなかった。時局はかなり厳しくなっ  
ていたので、私はその日砂漠から小包をいくつか送り出すため、車が必要だった。それでホセは送迎  
バスで出勤し、私に車を残してくれることになっていた。だが私は早朝やはり車でホセをバスの乗り  
場まで送った。

帰り道、地雷が恐ろしかったので、いっさい近道はせず、アスファルトの道路の上だけを走った。

町に入る坂道で、燃料メーターがゼロになっていることに気がついた。ついでにガソリンスタンドに寄って行こうと思い、時計を見たが、まだ六時十分前だった。スタンドはまだ開いていないので、方向を転換し家に帰ろうとした。ちょうどその時すぐ近くの町の大通りから、突然ドーンとひどく大きな爆発音が轟き、続いてまっ黒な煙がもくもくと空に上がった。あまり近くだったので、その時私は車の中にいたのに、びっくりして胸が早鐘のように鳴った。すぐに家にむかって車を走らせると、町の救急車がサイレンを鳴らしながら、飛ぶように走って行く音が聞えた

午後になって帰って来たホセは私に聞いた。「爆発音を聞いたかい？」

私はうなずいて答えた。「怪我人が出たの？」

ホセは突然言った。「あの軍曹が死んだ」

「砂漠軍団の、あの？」他の軍曹のはずがないことはわかっていた。「どうして死んだの？」

「彼は朝早く車を運転して爆発したところを通りかかったんだ。ちょうどそこでサハラウイの子供たちが箱を玩具にして遊んでいた。箱の上にはゲリラ隊の小さな布の旗が挿してあった。軍曹は多分その箱がおかしいと思ったのだろう。車を降りると子供たちの所へ駆け寄り、箱から遠ざけようとした。だが、子供の中のひとりが旗を抜いた。箱は突然爆発した——」

「サハラウイの子供たちが何人死んだの？」

「軍曹の身体が、先を越して箱の上に覆いかぶさった。あいつはばらばらになったが、子供たちは二人が怪我をしただけだ」

私は呆然としたままホセの食事の支度を始めた。頭の中ではずっと早朝の出来事を考えていた。十

六年もの間恨みに取りつかれてきた人が、最大の危機に瀕した時、自らの生命を投げうってその死と引き換えに、長年かたきと恨んできたサハラウイの子供の生命を救った。なぜ？ まさか彼がこのような死を迎えようとは思ってもよらなかった。

翌日、軍曹の死体は、棺に納められ、空っぽになった共同墓地に静かに埋葬された。彼の兄弟たちはすでにそこを去り、別の土地で安らかに眠っている。だが彼は、ともに行くには間にあわず、静かにサハラの大地に埋葬された。彼が愛し憎んだその土地は彼の永遠の故郷となった。

彼の墓碑は簡単だった。私はずいぶんたってから中へ入って見たが、碑にはこう刻まれていた——

「サバ・サンチェス・ダリ、1932-1975」

帰り道、サハラウイの子供たちが広場でごみ桶を手で叩きながら、リズムカルな歌を歌っていた。夕日の中で、それはえも言われぬ平和な光景で、まもなく戦争が始まろうとすることなど知らぬかのように思われた。